

「櫻齋隨筆」四卷く六卷より抜粹

(解説・鹿嶋古文書学習会)

「目次」

- 一、 鹿島の人の言葉遣い(鹿島訛り)を笑う
- 二、 鹿島洋の妖火
- 三、 息栖村砂山にて水牛の鬪い
- 四、 鹿島に中新道を開設
- 五、 鹿島山内にて大蛇を見る
- 六、 大施度祈禱式
- 七、 フツノミタマの劔
- 八、 鎌足神社
- 九、 鹿を神の使という説
- 十、 水戸弘道館に鹿島神社創建のこと
- 十一、 博徒の勢力富五郎
- 十二、 宮中村にて江戸相撲興行
- 十三、 鹿島山中の白鹿と尾長の鹿
- 十四、 樺太地方に鹿島神宮建設と御霊代送り
- 十五、 平井村の娘の狐つぎの話
- 十六、 鹿島にて鷺を銃猟す
- 十七、 波逆江の竜巻
- 十八、 鹿島の神山の鹿、晴雨を前知す

一、鹿島の人の言葉遣ひ（鹿島訛り）を笑う

弘化四年丁未五月廿日、京都御幸町旅人宿松屋吉兵衛方へ着ス。同廿三日、

かしざしきぎよう

かた

たびにんやど

なり

うちだしとみ

たかやすご

貸座敷業河内屋文四郎方へ引移る。主従四人也。予のほか内田蒔、高安五郎兵衛、木滝弥助各大町の住人。是より先京都の人、井筒屋弥兵衛と云もの

鹿島下り久敷住居す。河内屋は同人の従弟也。即日蒔と弥助ハ所用あり天

他出。予と五郎兵衛在宿尔天、在京中借切り自分賄の支度致し居多る所へ

彼の弥兵衛の老母来り。臺所尔天五郎兵衛尔逢ひ、ウチマキは参り志やと問

ふ。五郎兵衛、薪ハ未多来ら須と答ふ。媼、薪やでハ御ざりませぬ。オヨネ

で御座ります。五郎、夫シナ女は参りませんと答、媼ハ大きに呆れ笑ひ天、

困りたる体由多、奥尔阿りて予も余り聞可年、臺所へ立出、白米ハ先刻参り

た里と答しかバ、媼も了承して帰りぬ。五郎ハ、ハア白米の事可、夫シ奈

らバ米といへばよい尔と、大不平由多、予云。ウチマキとハ、精米のこと也。

夫ガ了解せぬ故、オヨネと云ひ多る也。人の名も米と書とヨネと呼ぶ也。

ウチマキハ、大和言葉也。其方等を上等客と心得天、大和言葉を遣ひ多る

奈らん。以後も心付よと言つ介多り。果ハ大笑也。其後四人共洛内外遊行

し天、帰り多る夜、媼来り。今日は唯御草臥尔天、オミヤガ御旁奈らんと云。

五郎、取敢不案内由多、御土産ハ買須と云。媼、又大笑せり。去ども五郎

にハ分らず。媼も気の毒奈る体由多、予ハ長き旅路尔馴多連者、足も旁須と

云ひ笑ひ多り。媼帰りし後尔、五郎、ナゼ土産を笑ひし奈らんと不審く思ふ

体由多、オミヤとハ予ガ足を御足といふ心也と諭し介れば、夫シ奈らバ

オアシといへ者、王可るにと又笑ふ。亦或日予ガ繪を画多る処へ媼来りて、

辛気くさ起事なさりますと云ふ。五郎、又何シ尔も火へ、く者りハ志ません

と云。居合たる人、皆ドツと笑ふ。去ども五郎尔ハ分ら須。予も此頃ハ懇意

尔なりしか者、其席尔て辛気とハ関東で云ふ、面倒奈ること越云ふ也と諭し、

又大尔笑ふ。平常ともに質朴尔て、心尔思ふ事ハ何の思慮も無く云ふ由多、

のちのち は やじ 弥二さん いわ た またあるあさみそしる ふそく
後々に者、弥二さん／＼と言れ多り。又或朝味噌汁の不足したること阿り。
五郎兵衛しるわん もちておもや いた おつちー わんかくだされ いう いあわせ かない
五郎汁椀を持天表家に至り、オツチーをワンカ被下と云ふ。居合せし家内
いちどうにわか ず なにしなにや きか たたおつちーオツチーいいて ついにわか ずだいふきよう
一同尔分ら須。何品尔やと聞れ、只オツチー／＼と云ひ天、終尔解ら須大不興
むな かえ ほじなくおうなきた てき ぶく わびごと
して空しく帰りたり。無程媪来り天氣の毒がり侘言せり。予もお可しき越こ
え おつちー は おしる なま なり またわんか は わずか なま なり いてわら
らへて、オツチーとハ、御汁の訛り也。亦ワンカとハ、僅の訛り也と云ひ天笑
いた のちまたよひとりざし とき おうな いう だんなさま はじ しま
ひ多り。後又予獨座の時、媪の云ふ。旦那様を始め薮さん、弥助さむの
おことばは ききわか が ごろうべえさん おことば とかくわか かねそつろう
御言葉ハよく聞分りまするガ、五郎兵衛さむの御言葉は兎角分り兼候。
おくにがちがいそつろう ふしん ゆえ よはえどしゅつせい 内田薮 木滝弥助 かしまな たびたび
御国可違ひ候やと不審する故、予ハ江戸出生、薮、弥助も鹿島奈れど度々
えど で ゆえ ものいい ごろうべえ どうこくな せけんしらざるゆえなり こたう
江戸へも出る故、物言よろし。五郎兵衛も同国奈れど世間不見故也と答。

二、鹿島洋の妖火

てんぼう はじめのころ しもぶさちようしみなとに ぼうきはやばし のひきやくふ あ あるときしきゆう ようむきに
天保の初頃、下総銚子湊尔、剛氣早走り能飛脚夫阿り。或時至急の用向二
つき おお て み とじようかまで行くべきむね頼まれ このひはぼうふううに しか
付、大いそぎに天、水戸城下迄可行旨被頼しに、此日ハ暴風雨尔て然もはや、
ゆうむっどきな (夕方6時) つね なかなかしゅつたつなりがた を れい ぼうたん
夕六ツ時奈り。常の脚夫ならば中々出立成可多き越、例の剛膽もの由
え すこし じ うちたつ はさき とせん くつきよう ふなこ にて ころうじてわた
ゑ、少しも辞せず打立。波崎の渡船も屈強の舟子三人尔天、辛らふし天渡り、
これより常陸の海岸を歩み由くに、矢田辺村を過ぎ天、太田新田尔も近支頃、
たつみおきかたいつかん ようかしゅつげん しだい りくろにちかよ み まになみ はな
異冲方一團の妖火出現して、次第に陸路尔近寄ると、見る間尔浪を放れ、
陸尔上り砂上を走里廻り、終尔脚夫の前後をめぐれるを、能く見るに、其頭
おぼしきころは こども もちあそ かぐらじしのあたまほ に いろはあおあか こうせんは
ともお不しき所者、小児の持遊ぶ神楽獅子能頭不ど尔て、色ハ青赤く光線者
な なが すじ ひき かに いまわ にて はや とりな はし
無く、長く筋を引支、い可尔も忌はしきもの尔天、早きこと鳥奈どの、走る
にて あし あ か おもわるるさまなり この飛脚夫 つね ながわき差しのかたな おび
に似天、足も阿る可と思ハるゝさ満也し。此脚夫、常に長脇さし能刀を佩び、
またおお な てつ ぶんどう なが くさり こしにまといおりたるが ようか あま
又大い奈る鉄の分銅つきたる、長き鎖を腰尔纏ひ居多流ガ、妖火の餘りうる
さく足もとに来り天、往先を妨る由ゑ、可の分銅くさり越手繰り、力にま
か かいぶつ あたま ほ ところ なが けた てごたえ ようかは みじんに
可せ、怪物の頭とお保しき所へ投つ介多るに、手こ多へして妖火ハ、微塵尔

くだけちる み が く 多け散ると見えしが、おの連も其俛気絶して、夫より以後の事は更尔知らざり志尔、しに 曉近起頃此村の者ガ濱辺見廻りに来り。倒連たるさまを認め、助介られ、や 稍々蘇生志天、水戸尔至り用を弁せしと。一生かゝ累恐怖き事は、な可りしと。後尔下生直勝尔語りし由、同人より話也。

三、息栖村砂山尔天、水牛の闘い

あるあき う 或秋の雨中深夜尔、太田新田の砂山下迄至りし尔、何やらん砂山尔天、大尔うめくこゑして、カチン／＼とは介しき音の聞えし由多、恐怖し天不う／＼にげかえ が 逃帰りしが、餘り不審さに翌日ハ雨もやみし由多、舟尔天昨夜聞し処尔至り、砂山尔上り見るに何もあやしきこと者無く、只大奈る蹄の跡残りて、その蹄ハ牛の蹄尔似天、甚多大奈り。是ハ兼て聞及し水牛尔て、雨の夜奈どにハ、上陸春ること阿里。両牛の闘天、角の觸たる音能、高く聞えし奈らん。此事ハ稀尔ハあ連ど、白昼尔見多る者無しとの話なり。予案るに、牛馬ともに遊牝の時尔ハ、互尔牝を争ふて闘もの奈連ハ、水牛も同じく闘争せしならむ。

四、鹿島に中新道を開設

ぶんか (1808年) 文化五年 戊辰十一月、桜町一同のものより願尔付天、當家門前右手より神前二の鳥内迄、新道を開く。是を中新道と称須。

(※これが現在の鹿嶋の桜町から二の鳥居までの道である)

五、鹿島山内にて大蛇を見る

てんぼう す 天保の末乃頃、或夏宮下に住居する、修験者大教院三好右京、下津村辺尔

ようむき 用向ありて行たる帰りに、潮社より宮林近く来りし頃、行先の往来道中尔、黒き女帯乃如きもの横たはり阿る故、何人可帯を道中へ落したるや。余り心無き仕王ざと思ひつゝ近川く不ど尔、その黒支も能ハ見え須奈り怒。弥々、不審尔思ひ、その有りしとお不しき所尔至りて与く見流尔、道筋尔ハ変りたることも無く、左右乃小松林の内乃夏草、凡幅壺尺余も左右へ分れ、中ハ一文字に、車尔ても曳多る如くうちふしたり。これを見天、初天黒きものハ、大蛇奈るを知里、俄尔恐怖し急支逃帰れりと。

弘化の初頃、宮中佐竹中務の旧城跡、俗城山と称、尔天、或時壹人の木挽厨の住人、伐木して居多る処へ兎一疋、飛ガ如く逃行き介る由ゑ、何こと尔やと見る間に、其首、小兒の弄ぶ神楽獅子の頭程なる大蛇、首を地上より六尺不どたてゝ、大ひ奈る口を開き、彼の兎を追ひ来りしかば、木挽ハ大ニ恐怖し、斧鋸も打捨、不うく我家に逃帰り介るガ、夫より四五日、發熱して疾臥したりとぞ。

六、大施度祈禱式

慶長五年庚子八月、西國之軍起に付、家康君より大宮司則盛へ、祈禱を命ぜら流。九月十五日、玉串を持参の使者、藤川、の營に詣り玉串を奉る。君大に悦び玉ひ、歸國せしめ、以後猶天下安全乃祈里を命ぜらる。是より以後毎月朔日、朝脩行す。其式者朝辰刻、大宮司本宮大床尔昇殿して祈念。次尔社家組神官一同、廣間へ昇り祈念。次尔大宮司退下。外神官ハ列を正して御手洗下参り、霽神社へ参拝。夫より大町下宿、両霽神社へ参拝。又御手洗同社へ参拝。又下宿、同社同断。次尔樓門内、南北同社参拝。次尔本宮昇殿拜礼。一同退下。右終て後、大宮司家に於て、出勤一同及、炊役、神守、専道等へ朝飯を出す。正月は二ノ膳付尔天、肴二種酒等を出す。餘の

つきはいちじゆうにさい ころもののみなり
月八一汁二菜、香の物のミ也。

七、フツノミタマノ劔 つゝぎ

うとくいんくぼうさま (徳川吉宗公) しよこく じしやにあ じゆうもつ おとりよ じようらん に とうけん
有徳院公方様、諸國の寺社爾阿る什物を御取寄せ上覽ありし尔、刀劔
の類ハ於不く贗物ニ而、正真乃物ハ王つ可尔かそふる不ど阿りし。常陸鹿島
じんぐうにふつのみたまのほうけん ものあ よになだかもの ば じようらん べ
神宮ニふ徒のミ多まの宝劔といふ物阿り。世尔名高き物なれハ、上覽あるへ
とおせいだされけ みつるぎはおうこ いわおいし したにおさめ ついにはいけん
しと被仰出介るに。この御劔者往古より巖石の下尔収めありて、終尔拝見
せし毛の奈きよし、神主言上し介れハ、さも阿連、先くハしく糺春へきよし
ニて上使叅り、向ひ穿鑿阿りし丹、件の巖石越引の希多れハ、石擲の中尔、
ほうけん おぼしきもの ふくろにおさ ろうじ ふうじ ひらくべか ぎ 曲 なかに
宝劔と於保しき毛の、袋尔納めて窄しく封し、開く遍可らさるよし、書付阿
りし可者、上使歸りて言上せし尔。左様奈らハ上覽尔及ハ須。但その御劔
かたちいかよう もの ふくろ うえ さぐ もうしあげべし あ さぐ
の形い可やうなる物にや。袋の上より探りて委しく申上へしと阿り。佐く
みて に まことにほうけん おもわれ 殊 にふとくおおぶ ものにおぼえ その
りて見多る尔、誠尔宝劔と思ハ連、こと尔太く大婦りなる物尔覚へしと。其
しだいごんじようにおよび じようらん な やめ とぞ
次第言上ニ及び、上覽奈くて止ぬるとそ。

八、鎌足神社 かまたり

かしまじんじやこうにいう やしろかたわらしようほこら有り いわく だいしよく かのみやと言ひ伝える ふじわら
鹿島神社考ニ云。社傍有小祠。曰、大職 (織) 冠宮傳言。藤原
かまたりしよせいのところなり おおかがみ か がくしゆうならびいう かまたりひたちのひとなり これ以て証しなる可くや そのほか
鎌足所生處也。大鏡簾中抄下學集並云。鎌足常陸人也。是可以證矣。其它
じんぎこうに詳しきゆえくりかえさず 則考いう しょうのやしろこれなり なかとみふじわらいつかゆえ だいぐうじに て だいたいこれをまつる
詳神祇考故不復贅。孝云、下生社是也。中臣藤原一家故、大宮司尔天代々祭之。

九、鹿を神宮の使という説 しか じんぐう つかい

こじきに あしはらなかつくにことむけ かみ えらむ に あめおのはばりのかみは オオカミのちちがみなり
古事記尔、葦原中國平和せん神を撰ところ尔、天尾羽張神ハ、大神ノ父神也。

あめやすかわ みず さかさまにせきあげ みち ふさぎ わ あだしかみいく かなわ
天安河の水を逆尔塞上て道を塞お者しませバ、他神行ことか奈ハじ。よて
あめかぐのかみ つかわ とわ たまい かば たけみかづちのおかみ まい たまえ
天迦久神を遣して問しめ給ひし可バ、武甕槌大神をまゐらせ給へりしこと
あり 平 田篤胤氏 せつに あめかぐのかみは アメカグノカミに これ オオカミ しか つかい す
阿里。平田氏の説尔、天迦久神者、天鹿神尔て、古連ぞ大神の鹿を使と春
る起原なりといへり。え

十、水戸弘道館に鹿島神社創建のこと

ひたちおびにいう たけみかづち かみはぶのかみにて座しま ぶんぶ がっこうにぶのかみ み
常陸帯二云。武甕槌の神ハ武神尔天まし海す。文武の学校尔武神をのミ、
まつりたまうはいかが うたがうひと はふかきおほしめ に した
祭り給ふハ以可々と疑ふ人もあらん。これハ深き思召あること尔て、志多し
仰せ こうぶれる に ざれば その し べからず 君公 仰せに もろこし
く仰をかふれるもの尔あらされハ、其よしを知るへ可ら須。君の仰尔、漢土
がっこうはかならずこうし まつ こうしはせいじんじに ひと ひようじゆん す ところ ば まこと
の学校ハ必 孔子を祭る。孔子ハ聖人尔て、人の標準と春る所なれハ、誠
に なり れど しんこくに こうし は じんろう みち すて
尔さること也。さ連とも神國尔て孔子をのミ祭らんハ、神皇の道を捨天、
もろこしにしたがうに かみは のみち もとに こうし おしえは みち
漢土尔従ふ尔ひとし。神ハこ能道の本尔て、孔子の教ハこの道をたすけ、
ひろむるためなれハ、神を祭りて道の本を阿ガめ、つぎ尔孔子を敬ひて、
この道乃以やまし 成里尔奈りぬるよし 越示すべし。 中略。
わがひたちなるかしま かみは こうそんこうりんしたまうときたいせつあり かみなれば
わが常陸な流鹿島の神者、皇孫降臨志給ふ時大切阿りし神なれば、いざやこ
かみ みたま ちんざ おおせに たけみかづち かみ まつ たまい
の神の御霊を鎮座しめんと仰尔て、武甕槌の神をバ祭り給ひぬ。云々。
これは うし こうどうかん ときのおおせ 藤田東湖がしるしおけ なり しか
是ハ天保十二年丑、弘道館を開き給ふ時乃仰を 彪ガ志るし置介る也。然る
にわざわいの ありてひさ えんいん みの じんぐうぶんしにな

十一、博徒の勢力富五郎

かえい(1849年)みずのとう さいとうさいじ みぎりばくと おさ しもうさそうさぐん
嘉永二年 癸卯二月十五日、祭當祭事の砌博徒の長、下總匝瑳郡、
ばんざいむらな せいきとみごろうどうめかけながし こぶんらじゅうよにん おのおながわきざし おび やり も
万歳村奈る勢力富五郎同妾 某、子分等拾余人、各 長脇差を帯し、鎗を持
た てつぼうにはひなわ さんけいにんざつとう なか おうこう こねぎまつおかしげる
多せ、鉄炮尔ハ火繩をつけ、参詣人雑沓の中を横行せしを、小祢宜松岡茂

さしとめければ、速尔火繩を消し敬礼して退散せしが、程無く酒一樽持多せ
指止め介れば、速尔火繩を消し敬礼して退散せしが、程無く酒一樽持多せ
代人をし天、先刻ハ誠尔失敬恐縮の旨申述、且全く富五郎ハ仲屋方に
休憩中に天少しも存せ須、子分共の失礼仕候段、恐入候と申分
尔天、其より吉川常頼方へ立寄て大舟津へ下りたるよし。

勢力富五郎は上総下総つねしゅうにばっこ ぼうとなが さすがにそのやから おさ
勢力ハ両總常州尔跋扈せし暴徒奈がら、流石尔其徒の長たるもの故、敬神
の道ハ少しく心得たりと見由。仲屋尔休憩云々ハ全く偽奈りと云。

今日数多の神官も詰合た連ども、宿直人を始、皆搏徒の猛威に恐怖して遮
止むるもの一人も無しに、其職尔も非らざる松岡ガ止め多るハ賞須べし。

ひとり進ミ出してと云。兎尔角に賞春べきこと也。勢力ハ其後程奈く自殺
せり。吉川常頼が實父吉川常彦が勢力の劔術の師故立寄たる也。委しきことハ天保水滸傳奈
ど云講談尔天、世人よく知る由ゑ、略志て記さ須。

十二、宮中村にて江戸相撲興行
かえい(1850年)かのえいぬ さんがにち あいだ なかまちにおいて(福寿院旧地) えど
嘉永三年 庚戌五月十二日より三ヶ日の間、中町尔於天、江戸
大相撲興行阿り。番附左二。(※番附省略)。

但二壇目ニ住ノ井大助と云者阿り。当郡平井村住人。此時田舎年寄也。
右大相撲ハ當所尔天ハ珍敷事故記置也。

十三、鹿島山中の白鹿と尾長の鹿
鹿島の宮林中に純白の牝鹿壺頭、栖ミあるよし。又牛の如く、
尾乃長き、牝鹿も壺頭すみ居るを見多る人の直話也。

鹿島の宮林中に純白の牝鹿壺頭、栖ミあるよし。又牛の如く、
尾乃長き、牝鹿も壺頭すみ居るを見多る人の直話也。

十四、樺太地方に鹿島神宮建設と御霊代送り

樺太地方ヨリ楠溪へ出ル途中のヲハコタンと云處ニ安政ノ初年、幕府
の官吏 ほりおりべのしょうがじゅんし
ノ吏、堀織部正ガ巡視シテ、營マレシ鹿島ノ神祠アリ。

安政初年、外国奉行下役河津三郎来り天、樺太へ鹿島神宮勸請致尔付、
御霊代を戴度よし願出らる。仍而則瓊君、より御霊代を送られ候。

十五、平井村の娘の狐つきの話

弘化年中のことなりしが、本郡平井村の農某乃女儿、狐の憑たるアリ。

春の頃の或日かの女、大舟津村へ機の糸を染るとて紺屋某方へ持行しが、
立帰りて与り何と無く立振舞常尔異なり、言葉つ可ひ江戸人の音聲尔なりし

かば、父母を初め家族共等大きに驚き、如何致し候やと詰問するに、彼女
答天、我は江戸下谷山下邊に住む狐なり。近頃妻を亡ひ、川れくの俣、

風与鹿島の神宮へ参詣せんと思ひ立天、者るく下りしが、大舟津河岸尔て、
一ノ鳥居を見天、忌中に参詣せんは恐れ多き事と初天心付當惑せしが、是ま

天下り天空しく帰府するも残念なり。兼天聞及びし此地は河海爾浴天、
魚貝多しと。幸ひ此家娘、紺屋の店前尔うかとイみ居多る由多、其躰を

借りて海辺の宅は殊更都合よきまゝ来りしなり。何可鮮魚あらば早く調理し
て、酒も下りの上ものを飲すべし。魚も江戸風尔調理春べし奈ど云ふ。

言葉つ可ひ常の田舎訛りは、いづ方へ可失せ天、食物酒の好み奈ど尔、家族
驚怖し、先づ取敢須酒肴を出して餐し介るに、調理方も酒もよろしから須、

翌日は角せよ兎せよと、指揮するさ満、中々田舎娘の知る所尔阿
ら須。平目の指身に山葵の醤油ガよし。鯛は頬肉、眼、唇の肉奈どを潮煮

にせよ。酒も地酒は飲めぬ、早く外より取よせ与奈ど、例の江戸言葉尔天、

種々の好みを言ひ立て、諸人皆恐愕せざる無し。翌日は好みの酒肴を酒は宮中日野屋にて土浦の上酒を買出せしとか。出し、両親等も丁寧に餐して速に立ち去るべしと懇々説諭せしに、娘の云ふ、我も無據暫時止宿は為せども、斯る淋しく、むさくろ志き所は止るとも永く泊累べきや、鮮魚を飽まで食せば近日立去るなり。夫よりも酒の相手を出須べしと能く由る、同村の若者ども興阿ることに思ひ天、代り／＼出て酒飲ミ遊び介れば、娘大きに悦び天、流行の端歌など唄ふに、常尔ハ少しも知らぬ節づけなど、清らかにうたい、又酒量も強く、数人と終日飲ども酔多る躰も無く、後尔尔う多ひしとぞ。又酒量も強く、数人と終日飲ども酔多る躰も無く、後尔は狐拳などうつ尔、一人も勝もの無く、相手の出す手を早く了知して勝こと実尔驚く者可り奈りと。時尔同村の里正某も聞傳天、其翌日來り天酒飲ミ、藤八拳をうち、又狐拳もう川尔、一度も勝を得ること能ハ須。赤面して逃去りしよし。其後三四日過天も立去らざる由る、其父母より神野物忌家司某兼へ依頼して祈祷を初め、追々議論尔及びしガ娘は更尔恐れず。去ども最早此家尔も倦たれば翌日立去るべし。夫尔付てハ小豆飯を焚き、鰯の油揚げ添、藁包尔志て未明尔宮中奈る海邊の社の側奈る大松の枝乃高から須低からぬ程能処、犬などの取ること能ざる枝尔掛け置べし。夫を翌日の昼弁當尔し天、旅行る也と云ふ尔任せ、其通りに為し置介るが、夜明て後、娘は一問より立出天、戸口まで出ると見えしが、其俣尔其処尔、倒れ天氣絶せり。家族共助けて床褥の上尔臥させ介るに其俣眠りて、又夜中起直り天、従前の如き由る、家族共うち驚きて其故を尋るれば、娘の答る様ハ、今朝ハ約束通り立去りしかども、知る如く俄の大風吹起り天、大舟津の渡船は浪尔由られ、眼もくらむ者可里由る、我如き江戸もの、馴れぬ船にハ乗ること能ハ須、無余儀再度立歸りし也。風さへ凧たらん尔は、明朝ハ立退くべきゆえ、またまた手数乍ら、弁當は今朝の如く、取計ひ頼む也と云ふ尔、暁よ10り家族共は起出天見るに、其日は風も穏尔奈り介れば、弁當も昨日通り、

とりはからい 取計ひ置しガ、夜明天後尔娘は昨日の如く立出しガ、又倒れ天人事を知らず。
家族ども例の如く臥させしガ、第三日迄熟睡して其後初て夢の覺たる如く、
常躰にハ成りし可ど余程放心したり。数日を経て全快せりと。又魅せられし
時のことは少しも覺須、言語起居も、素の田舎娘と成りたるよし。

十六、鹿島にて鷲を銃獵す

嘉永の初能ころ三笠山の松尔、鶉乃多く巢をつくり枝葉越枯す由多、鶉を追
立の為に行方郡根小屋村より銃獵を業とする兄弟の者を雇ひ、日々う多
せし事阿りしが、其頃山内の老松に鷲の宿るありし越、可の獵師二羽迄打留
多り。其一羽を予ガ金二歩尔天買得多るガ、尾は粕尾尔天、翼ハ
黒ホ口也。翼をひろげるハ八尺余ありし。尾ハ拾二枚あり。此内尔天尺二
矢二手を矧ガせ、余は賣拂ひ多り。彼是金貳両余尔奈りし。

十七、浪逆江の竜巻

昨年明治十七年 昨十七年一月、鹿島郡勝下村の海上尔天颶風を發し、同村尔てハ家作
を巻き阿希られしと聞しガ、予も先年浪逆江の冲尔天、水を巻揚るを見多り。
海河ともにあること尔天、予ガ見たるは暑氣の頃也。其響盤遙に遠くまで聞
るものにて、晴天奈ガら巻揚介る所尔ハ少しく雲氣を生じ、忽ちに空かき
曇り颶風（竜巻）を起し驟雨降来多れり。此水巻、時尔寄りてハ、雨中に
鯉鮒其他の河魚を降ら須こと度々阿り。何れも小魚也。又海上尔も同じこと阿り。
鹿島洋尔ても見る人あるよし。然連ど魚類盤海底深く沈由る尔や、魚乃降多
ることハ無しと。此水まき揚ハ龍の為す業尔し天、水中丹婦人乃帯のごと
11 きもの阿り天、翻るを見多るものもありと云へり。此水まきは驟雨尔奈る

のみにて、つむじかぜははげからず。されども大方は類したるもの奈り。猶其原因
のミル天、颯風ハ烈し可ら須。されども大方は類したるもの奈り。猶其原因
毛、何物奈るや知る能ハ須。

十八、鹿島神山の鹿、晴雨を前知す

あるひと問いて云う

或人問云。鹿島神宮尔七不思議阿りと。まことなりや。予答。往古より

りぞくはいいつたえ

いえど

よがいぶかしく

うはかみやま

しか

が

あすこううあ

里俗ハ云傳ると雖も、予ガ不審く思ふハ神山の鹿ども可、明日降雨阿らん

とすは ぜんじつせいてんに

かな

みやはやし

なんぼう

こぼくのはんもせるところにあつまり

きたり

あめはれ

あめなかにもかならず

ほつぼう

のほら

いでゆく

な

これはみなきに

たびたびもくげき

いしんごかみやま

おおかた

奈り。是ハ皆氣尔感じてのことなるべし。度々目撃せり。維新後神山も大方

官有地と奈り、銃獵者立入り、方今ハ鹿も跡を絶天、一ツの不審を闕多り。

かんゆうち

な

じゅうりようしやたちいり

ほうこん

はしか

あと

たえて

ひとつ

ふしん

かけた